

なぜ人は居場所を求めるのか

コロナ禍に注目される子ども食堂の役割

キムソヒョン

第1章 コロナ禍だからこそ注目されている子ども食堂

コロナ禍により、学校の体育祭、地域の祭り、コンサートなど様々なイベントが中止になり、様々な人々が職場を失っていく中で、「子ども食堂」という活動は逆に注目されるようになった。図1のグラフによれば、コロナ禍前の2019年には、子ども食堂に関する記事が3社の記事を全部合わせても60くらいで、100も超えなかった。しかし、コロナ禍による緊急事態宣言や休校要請により、学校も行けず、オンライン授業が行われるようになった2020年には、子ども食堂に関する記事が飛躍的に増え、最も多かった時には、新聞会社3社の記事を全部合わせて150件を超えるほどだった。その後、やや低減したが、21年にまた増え続けていることが分かる。また、図2の「認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ」（以下、「むすびえ」）のデータによれば、年々、子ども食堂の数は増え続け、コロナ禍により、活動が制限されている今でも子ども食堂の数は増え、今では、役6007箇所に入ったという。外出を控え、密を作らないように呼び掛けていて、様々なイベントが中止になっていく中で、なぜ子ども食堂の活動は注目されるようになったのだろうか。

本稿は、なぜコロナ禍でも子ども食堂の活動が注目され、子ども食堂の数が増え続けているのか、その謎を解くことが目的である。そのため、主に愛知県内の子ども食堂を対象に、コロナ禍前とコロナ禍後の、それぞれの活動の変化についてインタビューし、コロナ禍が子ども食堂に与えている影響と、コロナ禍による社会の情勢の変化に子ども食堂がいかに適応を試みているのかを明らかにしてみたい。

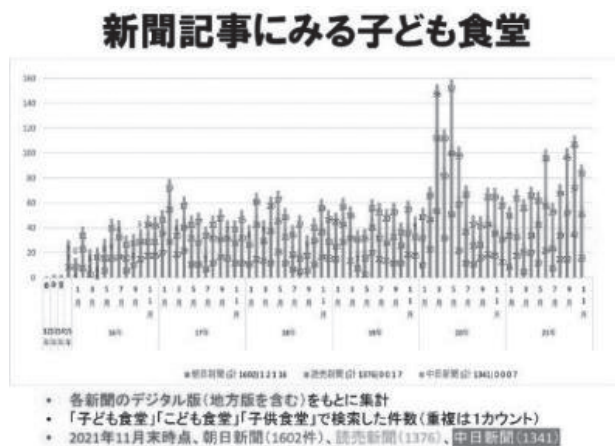


図1) 新聞記事に見る子ども食堂マップ

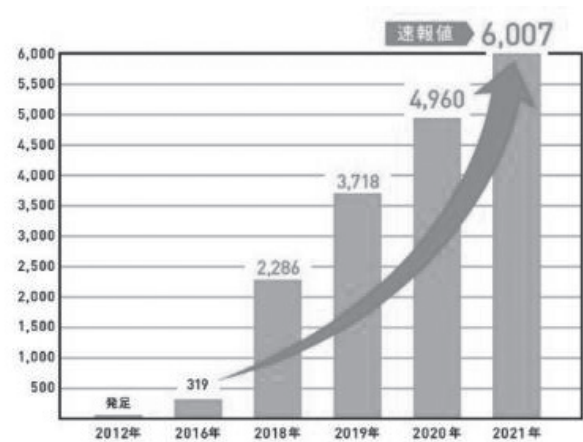


図2) 子ども食堂の数の変化マップ

第2章 子ども食堂の始まりとメディアの効果

「むすびえ」の定義によれば、「子ども食堂」とは、民間発の自主的・自発的な取り組みで、子どもが一人でも行ける無料または低額の食堂である。しかし、子ども食堂によって開催日数も、開催目的も、活動形態も異なるため、同じ子ども食堂であるとしても活動内容はさまざまだ。また、子ども食堂という名前から、子ども食堂が、子どもだけが利用できる場所だと考える人も多い。しかし、子ども食堂は子どもだけの場所であるとは限らない。子ども食堂によっては、参加者を子どもに限定しているところもあるが、子ども食堂を、地域の食堂として開き、参加者を限定せず、子どもやその親、外国人、高齢者など、誰でも受け入れている子ども食堂も多い。

私は名古屋市北区大曾根の「ソーネみんなでごはん」と愛知県豊田市の「ぬくもり♡ネット」という子ども食堂にしばしば参加しているが、この2つの子ども食堂はその名こそ同じだが、それぞれの活動は似て非なるものがある。まず、「ソーネみんなでごはん」は、地域の食堂という趣旨で子ども食堂を立ち上げ、会食型子ども食堂を開催してきた。しかし、コロナ禍により、会食型の子ども食堂を開けなくなり、弁当配布に切り替え、参加者を限定せず、550食の弁当とフードパントリーを配布している。次に、「ぬくもり♡ネット」は、参加者の安全や運営者が拳母小学校の卒業者であることから、参加者を拳母小学校の4年生から6年生に限定し、子どもと一緒に調理して食べる少人数の会食型子ども食堂を開催してきた。しかし、コロナ禍により子どもと一緒に調理するのが難しくなったため、支援者のみで調理を行い、ご飯を食べた後、子どもたちにちょっとした余興を楽しんでもらう形で行われている。私がかかわっている子ども食堂はこの2つだけだが、この2つの子ども食堂だけでも活動形態も、参加者も、規模も全く異なる。

このような子ども食堂の始まりは、近藤博子さんが、ごはんを当たり前食べられない子どもの存在を知ったの知り、2012年に、東京都大田区にある「気まぐれ八百屋だんだん」を立ち上げたことだという。これをきっかけに、テレビや新聞などで子ども食堂の活動が知られたことから、全国的に広まり、現在は、上で述べたように、6007箇所以上になったという。

メディアにより、子ども食堂の活動が多く知られたのは事実だ。しかし、子どもの貧困、食材や弁当の配布、貧困家庭の支えになっているという一部の面だけに注目して書かれ、「子ども食堂は、子どもが行く場所だ」、「子ども食堂は、貧困な人が行く場所だ」という偏見や誤解が生まれてしまったのである。しかし、子ども食堂は、子どもだけのための場所でも、貧困な人が行く場所でもないし、子どもの貧困を解決するためだけの場所でもない。確かに、子ども食堂によっては貧困家庭を支援するために子ども食堂を運営している子ども食堂もある。しかし、上で述べたように、子ども食堂によっては、地域の住民や子どもの居場所として子ども食堂を立ち上げ、運営しているところも多い。そのため、子ども食堂が子どもだけのための場所だとか、貧困な人が行くところだというのは誤解である。子ども食堂の活動を多くの人々に知らせ、子ども食堂に関心を持ってもらうためには、メディアの力は絶対的に必要だが、書き方によっては、子ども食堂に偏見を持たせ、逆効果を生み出したりもする。

では、このように、活動形態も、目的も、参加者も規模も様々な子ども食堂の活動は、コロナ禍で、どのように変化してきたのだろうか。以下では、コロナ禍で子ども食堂の活動がどう変わってきたかを述べる。

第1節 コロナ禍による子ども食堂の活動の変化

上でも述べたように、ここでは、インタビューしてきた14箇所の子ども食堂の活動がコロナ禍により、どのように変化してきたかを述べる。下記の表は、子ども食堂の活動がコロナ禍により、どう変わってきたかを述べるためにコロナ禍前とコロナ禍後の子ども食堂の活動形態、参加者制限の有無、立ち上げのきっかけ等をまとめたものだ。以下では、この表を使い、子ども食堂の活動がコロナ禍により、変化してきたかを述べる。

インタビューした子ども食堂の活動の変化表

子ども食堂の名称		コロナ前の活動	コロナ後の活動	今後の活動
おかださんの台所	参加者制限	制限なし	制限なし	夏休みの平日に昼ご飯を提供したい。(親が仕事に行っている間は、子どもは1人になってしまうから)
	活動形態	会食型食堂	フードパントリー	
			テイクアウト	
			余興(ゲーム、くじ引き)	配達にも力を入れたい。
配達				
きっかけ	8年前に出会った父子家庭の子どもが夜遊びや飛行な行動に走ってしまったことを、子ども食堂があったらこの子を救えたかもしれないと感じ、開始した。			
かたろう食堂	参加者制限	小学生以上：子どもだけで参加可 入学前の子：保護者と一緒に参加	小学生以上：子どもだけ参加可 入学前の子：保護者と一緒に参加	子ども食堂の開催予定はなく、今の活動を継続していく。
			フードパントリー：民生子ども課から紹介してもらった家庭のみ	
	活動形態	会食型食堂	パンやおもちゃの配布(3か月)	フードパントリーを行っている家庭を対象に、夜ご飯食堂を開催したい。
			外遊び(気になる子を見守るための)	
			フードパントリー	自治体は情報を持っているので、一緒にフードパントリーを行いたい。
		子ども会議(子どもが主体になってイベントを企画)	学区内に駄菓子屋がなく、要望があったので、駄菓子屋さんをやりたいと考えている。	
きっかけ	高齢者食堂、育児支援はあっても、子どもたちの居場所がなかったことから当時話題だった子ども食堂を立ち上げた。			

ソーネ みんなで ごはん	参加者制限	制限なし	制限なし	会食型 + 弁当配布 (会食型に来られる人が限られていることが分かったし、配布だけだと参加者の声を聞きにくい)
	活動形態	会食型食堂	弁当配布 (予約制 + 当日配布) (550食)	
		いただきますもの 配布		
		学習支援	フードパントリー (協賛をいただくと配る)	
	余興	余興		
きっかけ	地域のおもんなが集える地域の食堂という趣旨			
太陽の家	参加者制限	子どもとその 保護者 限定	ひとり親の子 育て家庭限定 (自己申告)	
	活動形態	会食型食堂	子ども限定の 少人数会食型 子ども食堂	
			フードパントリー (150世帯)	
きっかけ	社会的に弱い立場に置かれた子どもたちの声を挙げられる居場所づくりという趣旨			
日進絆 子ども食堂	参加者制限	制限なし	制限なし	
	活動形態	会食型食堂	フードパントリー (ドライブスルー方式)	
			社協から認められた3ヶ所にはお届け	
			コンビニで食材を受け取れるサービス	
			体験	
きっかけ	<p>「定年者の集まり」という会があり、月2回老人施設を回っている。キッチン絆でランチ提供をしたり、桜の木を植えたりして人生の活性化になればと思って行っていたが、高齢者だけでは元気が出にくいため、子どもも必要であると考えた。また高齢者の考えや礼儀などを若い子に受け継いでちゃんとした子供に育ててほしいという思いも込められている。</p> <p>コミュニティの場を作るのは①スポーツ②音楽③食であると山崎さんは考えており、その中でも食を選んだ。</p> <p>昔はお金や物欲だけで生きており、その代償に健康を犠牲にしていた。しかし60歳の時、楽しいことをしたい、それで相手に喜んでもらえればそれが私の生きがいだと感じるようになった。</p>			

パーク サイド 食堂	参加者制限	制限なし	制限なし	定期的な学習支援活動（参加者増やしていきたい）
	活動形態	会食型食堂 (80人)	フードパントリー（40食） 開始（非常事態解除）	
		夏祭り 学習支援	弁当配布 (40食)	会食型の食堂再開（配布だけでは交流の時間少ない）
	きっかけ	孤食をしている子どもたちを減らせるようにという気持ち 地域の交流地点となれるようにと考え。親同士が情報交換を行い、交流を盛んにしてもらう。		
保見 プロジェクト	参加者制限	子どものみ	フードパントリー： 子どものみ	フードパントリーは配布して終わってしまい、交流する時間がなかなかないので、食堂を開きたい。
			卵配布： 制限なし	
	活動形態	朝食食堂 (10人)	朝ご飯のフードパントリー (20食)	
			卵配布 (60人)	
きっかけ	外国人問題について考えようとなり、色々調べたら、親が工場で働いている人が多く、時間がなくて、朝ご飯を食べたくても食べられない子どもがいるという問題や日本人とブラジル人が分離しているという問題があったので、子ども食堂でその問題を解決できるのではと思い、活動を始めた。			
みずほ みんなの 食堂	参加者制限	制限なし	みずほ： 制限なし	地域で頑張ってきた人たちをリスペクトし、協働して取り組めることを探したい。
			学びっこ： 子ども限定	
	活動形態	会食型食堂 (高齢者や外国籍の人の居場所)	フードパントリー (みずほみんなの食堂)	
			フードパントリー (まなびっこ)	
			学習支援	
ぬくもり ♡ ネット	参加者制限	拳母小学校の4～6年生	拳母小学校の4～6年生	学習支援をやってみたいという考えはある。
	活動形態	一緒に作って食べる会食型食堂 (19人)	3か月 フードパントリー (対象は食堂と一緒に)	
			会食型食堂 (17人)	
			余興	

よつ葉 子ども食堂	参加者制限	子どもがいる 家庭がメイン	食堂：子ども がある家庭	今後は今まで通りの活動をしていく。
	活動形態	会食型食堂 (多い時は 10家庭、 少ない時は 5～6過程)	弁当配布： 制限なし	お弁当の配布になってから新しく来るご家庭も増えたので、お弁当の配布は今後も続けていこうかなと考えている。
		イベント(夏 祭り、クリ スマス)	弁当配布 (50食)	
	きっかけ	「よつ葉の会」の理事長がテレビで子ども食堂の活動を見て興味を持ち、「浴衣を着たことがない」「鍋を家族で食べたことがない」という子どもたちに、その体験をさせてあげたいという思いから 障害者の働くレストランの偏見を無くす意味もあった。		
WAIWAI のわミー	参加者制限	制限なし	制限なし	引きこもっている人にアプローチができる体制を作りたい。
	活動形態	会食型食堂 (20人前後)	会食型食堂 (20人前後)	
		学習支援	フードパントリー(毎週月 水金、生活困 窮者を対象)	宅配
	きっかけ		子どもの貧困をなくしたい。	
キッチン キング	参加者制限		ひとり親家庭 限定(確認x 来た人には全 部渡している。)	24人分入れる環境があることから会食形式での開催を考えている。そうなった場合の弁当配布継続をどうするか、目下、検討中。
	活動形態		弁当配布 (70食)	加えて、人員確保ができるのであれば、週2回開催なども視野にいれていきたい。
	きっかけ	前から子ども食堂をやってみたいと考えており、職場の中のキッチン整備が整ったタイミングがたまたまコロナ禍だったので、コロナ化に活動を開始した。 ご飯を食べられない子どもがいることを知り、目に見えない貧困があることに気づく。そしてその問題を解決するために自分たちにできる事はないかという思いからこの活動を始めた。		
せんなり 子ども食堂	参加者制限		制限なし	月一回の活動を月に二回にしたい。(70食だったのを35食ずつ二日に分ける事が目標。)
	活動形態		フードパントリー(70食)	子どもだけ集め、会食型子ども食堂を実施したい(子どもの居場所を作りたい)。
		弁当配布		
きっかけ	稲沢市、北区、清須で子ども食堂にボランティアスタッフとして参加していたが、「中村区でも子ども食堂をやらないか？」と提案を受け、社協と相談して立ち上げる事になった。子ども食堂としては地域の活性化、いろんな人とコミュニケーションを取れる場所を作りたい。			

子ども食堂 Qchan	参加者制限		制限なし	コロナ禍が明けたら子どもたちを連れて農業体験をしたい。
	活動形態		会食型食堂 (緊急事態宣言中： 10～15人 緊急事態宣言明け： 20～30人)	
			弁当配布	
きっかけ		独居老人の方と、参加者の子どもたちの文通		
		昨年、コロナ禍の中で、子どもたちや高齢者が孤立して大変になっているという報道や現状を見て、今だからこそやろうと思い立った。飲食店をやっているお店なので、厨房器具や客席があったため、2週間で立ち上げることができた。		

インタビューしてみた結果、私が見つけたコロナ禍による変化は6つある。

1つ目は、活動の幅が広がったということだ。14箇所の子どもの食堂全て、コロナ禍前は、会食型子どもの食堂を開いていた。しかし、コロナ禍により、会食型子どもの食堂を中止せざる終えなくなり、つながりを保つため、必要としてくれる人がいるから、寄付してもらったものがあるから等の理由から、会食型子どもの食堂の代わりに、配布型子どもの食堂に切り替え、フードパントリー、弁当配布、宅配を実施していることが分かる。しかし、中には、太陽の家のように子ども限定の少人数会食型子どもの食堂とひとり親の子育て家庭限定のフードパントリーをどちらも開催するところもあれば、ぬくもり♡ネットのように、会食型子どもの食堂の開催が困難な時だけフードパントリーを開催し、会食型子どもの食堂をメインに開催しているところもある。また、よつ葉子どもの食堂のように会食型子どもの食堂と弁当配布を同時にやっている子どもの食堂もあるし、WAIWAIのわミーのように、何らかの工夫をして会食型の子どもの食堂も継続して開催しているところもある。コロナ禍により、多くの子どもの食堂が、接触を最小限にする配布型子どもの食堂に変わったことが分かる。

2つ目は、コロナ後に開催している子どもの食堂には少人数が多いということだ。現在も会食型子どもの食堂を開催している太陽の家、ぬくもり♡ネット、よつ葉子どもの食堂、WAIWAIのわミー、子どもの食堂Qchanなどを見れば、太陽の家は、子ども限定の会食型子どもの食堂を少人数で開催しているし、ぬくもり♡ネットは、拳母小学校の4～6年生を対象に、参加者17～19人の少人数で開催している。よつ葉子どもの食堂も会食型食堂は15食ほど用意し、少人数でやっている。最後にWAIWAIのわミーも参加人数は20人前後でフードパントリーに比べれば少ない人数だ。それに比べ、フードパントリーは、70食分とか550食分、150世帯分、40食分、50食分等のように、子どもの食堂によって数は異なるが、コロナ禍でも少々多い方だ。

3つ目は、立ち上げのきっかけが居場所の提供だった子どもの食堂ほど会食型子どもの食堂や居場所の必要性を感じているということだ。ソーネみんなでごはんは、地域みんなが集える地域の食堂という趣旨として子どもの食堂を立ち上げた。現在は、コロナ禍により、参加者を制限せず、弁当配布を行っている。しかし、弁当配布だけでは、参加者と支援者の間でコ

コミュニケーションが形成されず、渡して終わってしまう。そのため、ソーネみんなでごはんは、弁当配布の必要性を感じながらも、会食型子ども食堂の必要性を感じ、コロナが明け、落ち着いたら、会食型子ども食堂を開催したいと考えているという。また、パークサイド食堂は、孤食をしている子どもたちを減らせるようにという気持ちと、地域の交流地点となれるようにという考えから子ども食堂を立ち上げ、コロナ禍では弁当配布やフードパントリーを続けているが、上でも述べたように、配布だけでは、交流時間が短いため、会食型子ども食堂の再開を必要だと考えている。よつ葉子ども食堂は、「浴衣を着たことがない」「鍋を家族で食べたことがない」という子どもたちに、その体験をさせてあげたいという思いから子ども食堂を立ち上げ、会食型子ども食堂とイベントを実施してきた。しかし、コロナ禍により、イベントが開催できなくなったことから、イベントの再開を求めている。コロナ間により誕生した子ども食堂であるせんなり子ども食堂は、地域の活性化、いろいろな人とコミュニケーションを取れる場所を作りたいという思いから子ども食堂を立ち上げ、今は弁当配布やフードパントリーを実施してきたが、子どもの居場所のために、子どもを集め会食型子ども食堂を開きたいと考えている。また、や子ども食堂 Qchan は、子どもたちや高齢者が孤立して大変になっているという報道や現状を見て、今だからこそやろうという思いから子ども食堂を立ち上げ、会食型子ども食堂を開催しているし、今後、コロナ禍が明けたら、子どもたちを連れて農業体験をしたいと考えている。このように、子ども食堂の立ち上げのきっかけが、地域や子どもの居場所である子ども食堂ほど、会食型子ども食堂や、体験、イベント等を必要だと考えている傾向があった。

4つ目は、コロナ禍により、弁当配布やフードパントリーを開始したことから、新しい参加者が増えたということだ。ソーネみんなでごはんやよつ葉子ども食堂によれば、弁当配布をやり始め、会食型に来られる人が限られていることが分かったし、新しく来るご家庭も増えたという。会食型子ども食堂は、知らない人と顔を合わせ、ご飯を食べながら会話をするので、人によっては、気まずさを感じたり、難しく感じる人も多い。また、会食には、身動きが不便な高齢者や、会社に行っている親は参加が難しい。そのことから、コロナが明けても弁当配布の継続していく必要があると考えている子ども食堂が多いということも分かった。

5つ目に、子どもの貧困の発見をきっかけに子ども食堂を立ち上げたが、開催していく中で、貧困問題だけではないということに気づき、貧困対策も、居場所の提供や食育、体験の提供、多世代、多文化のコミュニケーション等も活動の目的に入れて活動している子ども食堂が多いということだ。この表には載せてないが、「おかださんの台所」の岡田さんは、「1人でご飯を食べている子どもや生活に困窮して食べるものがない子供に、にぎやかな環境で食事を提供したい。そこから子どもの居場所を作りたいとシフトしてきた。」とおっしゃっていたし、みずほみんなの食堂の平野さんも「地域の困りごとを包括的にみていく必要がある。子供も大人も、若者も高齢者も誰もが何かしらの困りごとを抱えており、孤立に気づいていない、つながりを持ちたくない人もいる今の時代の風潮の中で、困っている人を助けていきたいという思いになっている。」とおっしゃっていた。また、せんなり子ども食堂の三谷さんも「共働きの多く、孤食をしている子どもが多いため、子ども同士で来る事もある。なので、子どもの居場所になりたい。」おっしゃっていた。さらに、子ども食堂 Qchan の藤江さんも、「参加者の中で、金銭的に困っている感じはしないが、最初は食べたことのないものばかりで、ほとんどのものが食べられなかったが、今は、好き嫌いはあっても、出されたものは全部食

べるようになった小学生の子どもがいる。ここから、お金の問題ではないということを実感した。また、食育も大切にしていきたいと考えた。」「子ども食堂を開催してみると、お金があるだけでなく、現代ならではの家庭事情（孤食、温かい食事を食べる機会が少ない）のもとに過ごす子どもが結構見えてきた。経済的には比較的恵まれているといわれる東区でも、子ども食堂の活動が必要であると実感しながら活動している。」とおっしゃっていた。このことから、貧困な子ども、もしくは貧困家庭のために自分に何かできることはないかと考え、子ども食堂を立ち上げたが、子ども食堂を運営していくうちに、貧困だけではないことに気づき、様々な目的も持って活動していることが分かった。

最後に6つ目は、コロナ禍により、必要な家庭に支援ができるようになったということだ。日進絆子ども食堂は、ドライブスルー方式でフードパントリーを行っているが、社協から認められた3ヶ所にはお届けに行っているし、コンビニで食材を受け取れるサービスも行っているという。また、かたろう食堂は、民生子ども課から紹介してもらった家庭を対象にフードパントリーを実施しているという。さらに、WAIWAIのわミーも生活困窮者を対象にフードパントリーを実施しているし、宅配も行っている。このように、コロナ禍により、多くの子ども食堂が、社会福祉協議会、民生子ども課などと連携し、本当に助けが必要な家庭への支援ができるようになったことも分かった。

コロナ禍での変化をもっと具体的に見ていくために、以下では、私が参加したことのあるソーネみんなでごはんを例に挙げ、ソーネみんなでごはんの今までの活動に沿ってコロナ禍による活動変化を分析することにする。

ソーネみんなでごはんの活動歴史

開催時間：17：00 スタートで、なくなり次第終了。

参加費：子ども無料、大人 200 円以上のカンパ

日付	形態	メニュー	人数	配食分 (お弁当 不足分)	ボラン ティア	その他
2018年 8月7日	会食	カレー サラダ	124	124		うずまき絞りという染め物体験
2018年 10月30日	会食	ハンバーグ かぼちゃサラダ	260	260		甲斐性ナッシュヤーズ（おやじ3人組）のお笑い絵本読みきかせショー
2018年 12月25日	会食	ミートローフ プチケーキ	176	176		楽器の生演奏
2019年 2月26日	会食	ちらし寿司 から揚げ アイス	205	205		・接骨院さんの無料整体サービス ・ハッピーリングチャリティ
2019年 4月30日	会食	エビフライ ナポリタン	161	161		・お菓子とデザートのおまけ付き ・のや接骨院さん無料整体サービス ・長坂木房さんとみんなでごはん、大工ワークショップ

2019年 6月25日	会食	ビビンバ チヂミ わかめスープ	228	228		・タナカモチヤキさんの手づくり紙芝居&唄 ・ナリス化粧品さんの無料ハンドマッサージ ・のや接骨院さんの無料整体サービス
2019年 8月27日	会食	流しそうめん カレー	234	234	39	・学習支援実施（みんなで夏休みの宿題をやっつけよう！） ・おやつタイム
2019年 10月29日	会食	オムライス かぼちゃスープ フルーツポンチ	225	225	32	・ハロウィンのお面づくりワークショップ ・ナリス化粧品さんの無料ハンドマッサージまたは眉カット ・のや接骨院さんの無料整体サービス
2020年 1月7日	会食	もちつき大会	187	187	30	・誰も騙されない?! ミスター伊藤のお笑いマジック ・のや接骨院さんの無料整体サービス ・ナリス化粧品さんの無料ハンドマッサージまたは眉カット
2020年 2月25日	弁当配布	ひつまぶし丼	257	257	14	<u>コロナでお弁当配布開始</u>
2020年 3月28日	弁当配布	まぜごはん から揚げ	196	196	12	ハッピーリングチャリティ
2020年 4月28日	弁当配布	ロコモコ丼	311	311	14	4/5 タケノコ掘りイベント開催
2020年 5月26日	弁当配布	ルーローハン	400	400	18	
2020年 6月30日	弁当配布	キーマカレー	367	337	16	
2020年 7月28日	弁当配布	照り焼きチキン丼	352	352	15	
2020年 8月25日	弁当配布	エビフライ わっばん 夏野菜の揚げびたし	400	400	14	
2020年 9月29日	弁当配布	チャジャン麺	475	475	24	9/13 城東園ハンバーグ祭り出店
2020年 10月27日	弁当配布	きのこたっぷり五目御飯	540	540	18	
2020年 11月24日	弁当配布	ひじき御飯 焼き鮭 おひたし	465	465	14	
2020年 12月29日	パン ト リー	福袋パントリー	151 世帯		20	抽選会

2021年 1月26日	弁当配布	ビビンバ	124 世帯	377	19	
2021年 2月23日	弁当配布 (+予約)	あんかけ焼きそば	133 世帯	391	19	事前予約受付開始 (10世帯)
2021年 3月30日	弁当配布 (+予約)	混ぜごはん から揚げ	152 世帯	535 (-85)	22	
2021年 4月27日	弁当配布 (+予約)	のり弁	150 世帯	500	18	
2021年 5月25日	弁当配布 (+予約)	ちらし寿司	148 世帯	491	18	
2021年 6月29日	弁当配布 (+予約)	山菜おこわ	145 世帯	553	20	事前予約受付開始 (世帯制限なし)
2021年 7月27日	弁当配布 (+予約)	トマトソーススパゲティ	152 世帯	551	24	
2021年 8月31日	弁当配布 (+予約)	キーマカレー	181 世帯	588 (-38)	20	くじ引き 学習支援コロナで中止 留学生支援開始
2021年 9月28日	弁当配布 (+予約)	ソースチキンカツ丼	190 世帯	632 (-32)	20	事前予約受付開始 (先着300食)
2021年 10月26日	弁当配布 (+予約)	ドライカレー ホタテ煮つけ添え	181 世帯	593	30	
2021年 11月30日	弁当配布 (+予約 受付)	マーボー豆腐丼 揚げ餃子	199 世帯	579 (-29)	20	
2021年 12月28日	パント リー (+予約)	福袋パントリー	222 世帯	222 世帯	45	事前予約(先着110世帯) 人形劇「あわてんぼうの チューちゃん」他

上記の表により、ソーネみんなでごはんの活動から見られるコロナ禍による変化は、以下の5つだ。以下では、この5つの変化に関して具体的に説明する。

- ①開催頻度の変化及び会食型子ども食堂から弁当配布への切り替え
- ②参加者（配食分）の増加と気づき
- ③イベントの有無
- ④ボランティアの人数の変動
- ⑤予約制の取り入れ

①開催頻度の変化及び会食型子ども食堂から弁当配布への切り替え

上記の表によれば、コロナ禍が始まった2020年2月を基準にソーネみんなでごはんの活動は大きく変わったことが分かる。コロナ禍前である2020年1月7日の活動までは、開催頻度は2か月に1回で、会食型子ども食堂を開催していた。しかし、2020年2月25日からは月1回に変化し、活動形態も弁当配布に変わっていることが分かる。この時期は、多くの子ども食堂がコロナ禍により、活動を中止していた時期でもある。しかし、ソーネみんなでごはんは、活動を中止せず、すぐに弁当配布に切り替え、活動を続けていた。それができた

のは、ちょうどコロナ禍が始まったころ、ソーネみんなでごはんは、開催 10 回目を迎え、ひつまぶし丼を用意していたが、コロナ禍で活動ができなくなり、ウナギを使えなくなるのを恐れ、急遽弁当配布に切り替え活動したのがきっかけだという。それをきっかけに、弁当配布ならコロナ禍でも活動を続けられると判断し、今まで続けている。

②参加者（配食分）の増加と気づき

ソーネみんなでごはんは、参加者を限定してなく、子ども、大人、1 人暮らしの高齢者等関係なく、誰でも受け入れている。参加者は、北区のご近所の方が多く、9 割は常連さんで、初めて参加する人は少ないという。コロナ禍前の参加者は、100 ～ 250 名程度で、変動はあったても平均 200 名程度だった。しかし、コロナ禍になり、弁当配布に変わってからは、配食の弁当数が回を重ねるごとに、だんだん増え、600（コロナ禍により、密を避けるため家族の代表者 1 人が来てもらって帰ることになっているため実際にソーネみんなでごはんに来る人は、200 名程度）を超えるようになった。インタビューを行ったときに、ソーネみんなでごはんの清川さんは、弁当配布になり、時間関係なく家族分を渡せるようになり、参加者（配食分）が増えたことから、会食型子ども食堂に来られる人が結構限られた方だということに気づいたとおっしゃっていた。会食のころは、子育て世代の女性が子どもたちを連れてくるが多かったが、弁当配布になってからは、会場まで歩いてこられないお年寄りや、仕事が遅く、その時間帯に来られない家族分まで渡せるようになり、数がどんどん増え、それだけ、ここに食べに来られなかった方が多いんだなっていうのが分かったという。

③イベントの有無

ソーネみんなでごはんは、コロナ禍前は、参加者にご飯を提供するだけでなく、その後も、参加してくれる人々に楽しんでもらえるように、染め物やお面作り、絵本の読み聞かせショー、お笑いマジック、楽器の演奏、接骨院さんの無料整体サービス、ナリス化粧品さんの無料ハンドマッサージまたは眉カットのように、イベントや少しの余興も用意していた。しかし、コロナ禍により、会食型子ども食堂を開けなくなってからは、染め物やお面作り、接骨院さんの無料整体サービス、ナリス化粧品さんの無料ハンドマッサージまたは眉カットのような余興は開催できなくなってしまった。しかし、参加者の方々に喜んでもらえるに、代わりに、年に 2 回ぐらいくじ引きや抽選会のようなイベントを開催している。私が参加した 2021 年 12 月 28 日の活動には人形劇を用意していた。

④ボランティアの人数の変動

コロナ前のボランティアの人数は、30 ～ 40 名くらいだった。しかし、コロナで難しくなったり、ご自身のご病気だったり、赤ちゃんが生まれることになったという方もいらっしゃったり、個人的な理由で来られない方も見え、コロナ第 1 波がやってきた 2020 年 2 月から一気に半分に減り、しばらく低迷していたが、コロナとの付き合い方も少しずつ分かってきて戻ってこられた方や、他に営業活動をして新しく参加して下さるようになった方などが集まり始め、現在は元に戻りつつあるという。しかし、以前は朝から夕方までのフルタイムで来られていた方が多かったが、今は、短時間での参加や単発での参加が多くなり、初めての方でも参加しやすいシステム構築、マニュアル作成などが必要になってきているのを感じているという。

⑤予約制の取り入れ

最後に予約制に関してだ。コロナ禍前の会食型子ども食堂を開催していたころは、予約制等は全くなかった。しかし、コロナ禍により、600食近くの行列を作ることや寒い中、外で長い時間待たせてしまうことを気かけ、予約制を取り入れたという。最初は、10世帯を限定に始め、次第に増やし、今は先着300食を限定に予約を行っているという。私が参加していた2020年12月28日の活動の時は、弁当配布ではなく、1世帯に1個の福袋のパントリーであったため、先着110世帯だった。

ここまでが、ソーネみんなでごはんの今までの活動から見られるコロナ禍による変化だ。ソーネみんなでごはんは、コロナ禍により、会食型子ども食堂が開けなくなり、弁当配布に切り替えたことから、参加者と交流時間が作れず、居場所としての子ども食堂を開催できなくなってしまった。しかし、弁当配布になってから配食分がどんどん増えたことから、会食に来られる人とは結構限られた人だったということに気づき、今後、コロナが明け、会食を開けるようになった場合でも、弁当配布を続ける必要性を感じるようになったという。また、コロナにより、ボランティアの人数やボランティアの参加方法も変化したことから、初めて参加するボランティアに関して、何等かのマニュアルを用意する必要があると感じるようになったという。このことから、コロナ禍により、居場所を奪われ、活動が制限されたりすることもあるが、今まで気づいてない新たなことに気づききっかけにもなったということが分かった。

第2節 子ども食堂の役割の変化

居場所、食育の重要性からつながりの維持（フードパントリーや弁当配布の活動は交流する時間が少ないが、困ったときに頼れる人、場所がそこにあるという安心感を与える。中には居場所の必要性を感じ、小規模の子ども食堂を開いているが、ほとんどの子ども食堂がコロナ禍によりフードパントリーを開催している。このことから、コロナ禍に開催困難な場合、配布のみに切り替え、活動し、コロナが明けたら少しずつ会食に戻していくのではないかと予測している。しかし、中には配布のみで行くと答えた子ども食堂や、配布も必要だと答えた子ども食堂がいることから、配布と会食どちらも取り入れ、開催される場所もあると考えられる。）

上では、コロナ禍による子ども食堂の活動の変化に関して述べた。ここでは、コロナ禍による子ども食堂の役割に変化はなかったのかを述べる。コロナ前は会食の子ども食堂を開き、居場所の提供、食育、経験や体験の提供、多世代、多文化交流等を行っていた。しかし、コロナ禍により、会食の子ども食堂を開けなくなったことから、絆、つながりを保つという役割として、フードパントリーや弁当配布に切り替え活動している。しかし、中には、居場所の問題や孤食等を理由として小規模で子ども食堂を開催しているところもある。以下では①貧困、②食育、体験提供、③居場所順にコロナ禍での変化を述べる。

①貧困

コロナ禍前は、日本の恥の文化により、貧困が目に見えにくく、レッテルが張られてしまうと本当に必要な方が来られないということで、子どもだけ、子どもとその親だけのように何等かの制限はしても、参加者を貧困家庭に限定せず、開催してきた。しかし、コロナ禍に

より、仕事を失ったり経済が厳しくなったことから貧困が目に見えるようになったり、社会福祉協議会や民生子ども課等と連携し、本当に必要な方に支援ができるようになった。コロナ禍前は、地域の居場所として、貧富関係なくみんなが集まっている中に貧困な人や子どもが、さりげなく混ざって楽しんで帰るといった形だったが、貧困が目に見えるようになった今は食を渡したり、宅配を送ったりで何等かの方法で本当に必要な方に支援ができるようになった。このことから、コロナ禍により、貧困が目に見えるようになり、貧困対策にも直接力を入れられるようになったということが分かった。

②食育、体験提供

現代の家庭は共働きが多く、親と過ごす時間が少ないため、子どもが家に1人である時間が多い。そのため、家族で食卓を囲み会話しながら食べるという時間が少なく、共に食べることで自然に学ぶ食育、マナー、栄養の大事さ等を知らない子どもも多い。コロナ禍前の子ども食堂は、そのような子どもたちに、栄養のある温かいご飯を提供するとともに、ご飯を食べながら多様な人とコミュニケーションすることで、食事や栄養の大事さ、マナーや食文化、等を学んでもらえるようにしていた。また、ゲームや折り紙、絵本の読み聞かせ、夏祭りやクリスマスパーティー等の多様な余興やイベント等を用意し、子どもたちに多様な体験を提供することで、楽しむとともに、挑戦する楽しさ、達成感、協力する方法、人とコミュニケーションする方法等、何等かを学んで、考えてもらっていた。しかし、コロナ禍により、会食型子ども食堂の開催が困難になり、フードパントリーや弁当配布に切り替えてから、自然とイベントや余興等の開催も困難になり、食育も、体験の提供の役割もできなくなった子ども食堂が多い。しかし、食育や体験提供の重要性を感じ、子どもを対象に居場所としての会食型子ども食堂を開催しているところもある。インタビューした子ども食堂の中で、子ども食堂 Qchan は、コロナ禍で子ども食堂を開催し、会食型子ども食堂を行っている。その中で、食育の大事さを気づいた経験があったとおしゃっていた。食堂に来る小学生の女の子1人が、金銭的に困っている感じはしないが、食べたことのないものばかりで、最初はほとんどのものが食べられなかったが、子ども食堂に参加してから、好き嫌いはあっても、今は、出されたものは全部食べるようになり、ここから、お金の問題だけではないということを実感したという。そのため、食育も大切にしていきたいと考えたという。また、よつ葉子ども食堂は、「浴衣を着たことがない」「鍋を家族で食べたことがない」という子どもたちに、その体験をさせてあげたいという思いから子ども食堂を立ち上げ、会食型子ども食堂とイベントを開催していたが、コロナ禍によりイベントを開催できなくなったことからイベントの再開を望んでいる。このことから、コロナ禍でも食育や体験の提供を大事にしていることは同じだということが分かった。

③居場所

コロナ禍前は、参加者を限定せず、会食型子ども食堂を開催することで、子どもやその親、ひとり親の子育て家庭、地域の住民、1人暮らしの高齢者、留学生のような外国籍の方等、誰でも受け入れ、多世代、多文化交流を行い、参加者同士、または、参加者と運営者間でコミュニケーションをすることで、信頼関係を形成し、地域の問題に関して地域のみならず考え、協力し、お互い助け合いながら、誰でも気軽に参加し、ほっとしていける場所という雰囲気形成してきた。しかし、コロナ禍により、会食型の子ども食堂の開催が困難になった

ため、多くの子ども食堂が弁当配布やフードパントリーのような配布型に切り替え活動をしている。会食型子ども食堂と違い、弁当配布やフードパントリーは、渡して終わってしまい、参加者とコミュニケーションができず、交流時間をなかなか取れない。中には、会食型の子ども食堂の開催もしているところもあるが、子ども、または、子どもとその親等に限定し、規模を縮小し開催している。そのため、多くの子ども食堂が、どうしたら昔のように、参加者とコミュニケーションでき、参加者がほっとしていけるような子ども食堂を開催できるかを悩んでいる。コロナ間位より、多くの店やイベント等が中止になり、居場所を無くした人が多い。そのため、コロナ禍だからこそ、コロナ禍前より、居場所を重要に思うようになったと思う。私が参加している『ぬくもり♡ネット』は、コロナ禍により、2020年4月から7月はフードパントリーを実施し、8月からはずっと会食型子ども食堂を実施している。2021年9月は、豊田市内に感染者が急増したことからフードパントリーに変わったが、また10月からはずっと会食型子ども食堂を開催している。私がここに参加したのは2020年2月からで、コロナ禍前の一緒に作って食べていたころのぬくもり♡ネットの雰囲気は分からないが、2月からぬくもり♡ネットに参加し、私が感じたことを少し述べることにする。ここに、参加して私が感じたのは、参加している子どもも、支援者の大人も、子ども食堂に参加している人皆がいきいきしているということだ。ぬくもり♡ネットは、子どもが少しでも安心して過ごして帰れるような雰囲気を作ることを大事にされていて、ご飯を提供するだけでなく、遊びの時間やモノづくりの時間等、子どもも参加して楽しめるような時間を作っている。私は主に、食事の前は調理の方において、調理や片付けが終わってからは、子どもたちの様子を見に行き、第一生命さんが考えてくださったゲームを楽しむ子どもたちを後ろで見たりする。マスクをしたり、椅子や机の諸読等行動に制限があり、面倒くさいこともあると思うが、皆、指示に従いながら、調理しているときの支援者の方々も、ゲームを楽しむ子どもたちもとても生き生きして楽しそうで、その時間を精一杯楽しんで帰っている。調理をするときの支援者の方は、調理をしながら、家族の話や、料理の話等、たまった話をしながら調理をしている。それだけだと思ふかもしれないが、支援者の方々を見ていると、皆さんとても楽しそうで、いきいきしていた。また、子どもたちも、友達と楽しむ時間ができてうれしいのか楽しそうに笑ってはしゃいでいた。ゲームをする時は、お互い競争したり、協力したり、譲ったりで、楽しむだけでなく、そのゲームを通じて、人とコミュニケーションし、配慮する方法、感謝の気持ち等様々なことを学んでいるように見えた。この経験から、ただのゲームでも、子どもを考えさせ、配慮や感謝、協力等様々なものを学ばせ、成長させていることに気づいた。このぬくもり♡ネットに参加した経験から、子ども食堂の居場所は、ただ食事を提供し、人と会える場所だけでなく、大人子どもかかわらず、人と交流することで、その人考えさせ、いきいきとさせる魅力的な場所だということを知った。また、そういう場所は、交流がなくなり、余裕をなくしている人が多いコロナ禍だからこそ必要に見えた。

この3つから、運営者が重要視している子ども食堂の役割に、コロナ禍の影響はあまりなかったように見える。しかし、コロナ禍により、貧困が目に見えるようになったことから、貧困対策に力を入れられるようになったし、全体的には、居場所としての会食型子ども食堂の開催を望んでいることから、コロナ禍だからこそ、居場所の必要性を感じている子ども食堂が多いということを知った。コロナ禍により、貧困な家庭に何等かの支援ができるようになったが、フードパントリーや弁当配布は、配布して終わってしまい、交流できる時間が少ない。しかし、フードパントリーや弁当配布も、参加者の人に困ったときに頼れる人、場

所がそこにあるという安心感を与えることができる。中には、フードパントリーはバラマキだと考えている人もいるが、フードパントリーや弁当配布を続けることで、子ども食堂の居場所を守り、会食型子ども食堂とは異なるが、子ども食堂がそこにあり、困ったときには頼れる人がそこにあるという安心感を与えている。しかし、中には、子どもの孤食、食育、体験経験の少なさの問題や、家にいる時間が長く、余裕をなくしている人が多いということから、フードパントリーや弁当配布を通じて、安心感を与えるだけでなく、コロナ禍前の居場所としての子ども食堂の再開を望んでいる子ども食堂が多い。では、なぜ多くの子ども食堂が、コロナ禍前の居場所としての会食型子ども食堂を求めているのだろうか。これは、下の3章で述べることにする。

第3章 なぜ居場所が求められているのか。

ここでは、なぜ、コロナ禍で、居場所をより重要に思うようになったかを居場所の定義を明らかにし、考察していく。

中藤信哉の『心理臨床と「居場所」』によれば、日本人が「自分」を形成していく上で、場に所属することは重要となるという。場に所属することは、その集団や組織との間に関係をもつことであり、この他者との関係が自己形成にとって重要となるという。つまり、我々が、自分の居場所を求め、探すのは、その場所にいる集団の他者と関係を持ち、交流することで、自分を形成していくためである。また、本によれば、「居場所」は、論者により、さまざまに定義されているのが実情だが、「自分が自分であるための環境」、「アイデンティティ（自分が社会に生きている証拠）を確かめることができる場所」、「他者との関わりのなかで自分の位置との将来の方向性を確認できる場」、「安心して人といられる場所」、「自分らしくできる場所」、「心の拠り所となる物理的空間や対人関係、もしくはありのままの自分で安心していられる時間を包含するメフィー」のように、「安心」という要素と、「自分」という要素を含め定義することが多いという。これらを総合し、自分の居場所を求め、探すというのは、他者と関係を持ち、交流することで、安心感を得られ、自分が自分らしく、いきいきといられる場所を探すということになる。参加者として、支援者として、または、寄付者として等、何等かの方法で子ども食堂の活動にかかわっていた人にとって、子ども食堂がその人の安心できる場所や自分が自分らしくいられる場所、いきいきと感じられる場所だったということになる。しかし、コロナ禍により、多くの子ども食堂が、半強制的に、会食型子ども食堂から弁当配布やフードパントリー、参加者を限定する等で規模を縮小した会食型子ども食堂の活動に変化せざるを得なかった。そのため、参加者間、もしくは、参加者と支援者間の交流ができなくなり、「所属する安心感」や「自分らしさ」を感じさせていた場所を奪われたことになる。私は、ここに子ども食堂が居場所を求めている要因の1つだと考えている。

コロナ禍前の子ども食堂は、参加者を限定せず、誰でも受け入れていたため、孤食、食育、子どもの貧困、子育ての支援等の地域の多様な課題に関わり、地域のみんなで自分ができることをし、その課題の対策を考え、取り組んできた。そのため、子ども、その親、1人暮らしの高齢者、外国籍の方、支援者、ボランティアの学生など、様々な人々の居場所になり、その人たちに安心感を与え、そこにいることだけでも役割を持ち、自分自身を感じさせ、時には成長させ、何等かの影響を与えてきた。しかし、コロナ禍により、会食型子ども食堂からフードパントリーや弁当配布に切り替わり、子ども食堂に来ていた人々が、交流できなく

なり、わいわいしていた子ども食堂が、物を渡すだけの食堂に変わった。上でも述べたように、会食の代わりに、フードパントリーや弁当配布に切り替え、活動をし続けることで、子ども食堂を居場所としていた人たちに、コロナが明けたら戻ってこられるという希望や、その場所がそこにあるという安心感や困ったときに頼れるところがあるという安心感を与えている。しかし、もらって帰るだけでは交流する時間が少なく、何か役に立っているという気分も感じられない。つまり、子ども食堂の居場所の喪失は、役割の喪失につながる。人は、当たり前前に持っていたものの大事さに鈍く、失う前には気づかない場合が多い。そのため、一度失ってしまえば、より恋しく思い、後悔することが多い。今回の居場所の喪失に関して、そういう心理が作用したのではないかと考えている。そのままの自分を受け入れてもらい、そこにいられるだけでも、誰かの役に立ち、他者と交流することで、達成感や安心感、所属感を感じさせていた場所があり、そういう経験を持っているからこそ、失ったことで、もっと恋しく思うようになったのである。また、コロナ禍により、多くのイベントが中止になったり、お店がなくなったり、学校が休校になるなど、子ども食堂だけでなく、顔を合わせ交流する場が減ったため、地域の人々が集まり、地域の居場所になっていた魅力的な場所をより必要に思うようになったのだと思う。

第4章 多様だからこそ注目される子ども食堂

本稿では、なぜコロナ禍でも子ども食堂の活動が注目され、子ども食堂の数が増え続けているのかを明らかにするため、インタビューを行った愛知県内の子ども食堂のコロナ禍前とコロナ禍後の、活動や役割の変化を分析し、コロナ禍が子ども食堂に与えている影響と、コロナ禍による社会の情勢の変化に子ども食堂がいかに適応を試みているのかを考察してきた。

コロナ禍により、会食型子ども食堂の開催が困難になったため、多くの子ども食堂は、会食を止め、つながりを維持するために弁当配布やフードパントリーのように、人との接触を最小限にする活動を継続して開催している。そのことから、予約制を取り入れたり、貧困家庭や、その場に来られない人のために宅配を開始したりで、活動の幅は広がったり、参加者を数は増えた。しかし、フードパントリーや弁当配布は、配布して終わってしまうため、交流が生まれず、参加者の声を聴きにくい。また、コロナ禍前のように、その場にいることだけで役割を持ち、他者の役に立っているという気分は感じられない。コロナ禍前の子ども食堂は、支援者も参加者もそこにいることで、地域の課題に関わり、お互いに助け合うというwinwin関係にあった。しかし、コロナ禍により、配布して終わってしまう活動に変化してから、参加者との交流が減り、やりがいや達成感、所属感等を感じにくくなった。そのことから、現在の多くの子ども食堂は、居場所の必要性を感じ、昔のような子ども食堂の活動に戻せるためにはどうすればいいか工夫している。学校が休校になったり、オンラインになったり、多くのイベントや店がなくなり、居場所を無くした人が多い今の社会で、参加するだけでも役割を持ち、地域の課題に取り組んできた子ども食堂の活動は、魅力的に見え、今の社会でもっとも必要な活動に思われ、注目を浴びているのだと思う。

しかし、このように、交流時間が少ないにもかかわらず、今の子ども食堂が注目を浴びているのは、子ども食堂が多様な地域の課題に取り組み、多様な役割を持っているためである。子ども食堂は、食育、地域の居場所以外にも、経験提供、貧困対策、子育て世代の支援、高

齢者の生き甲斐など様々な役割を持っている。そのため、性別、年齢、国籍、職業、貧富などにかかわらず、多様な人が集まり、多様な主体の、多様なニーズを満たしている。そのため、活動の幅が広い。世間では、フードパントリーや弁当配布は、ばらまきだと言う人もいるが、昔のような居場所としての子ども食堂を開催するためには、その場所を維持させ、今まで築いてきたつながりを維持させていく必要がある。フードパントリーや弁当配布は、参加者と交流する時間が少なく、所属感、やりがい等を感じにくい、頼れる場所があるという安心感を与えることはできる。地域の交流が少なく、心の余裕をなくした人が多い今の社会で、頼れる場所があるという安心感だけでも大きな意味を持つと思う。さらに、コロナ禍により、貧困が目に見えるようになったことから、社会福祉協議会や民生子ども課と連携し、本当に支援が必要な人に手が届くようになったことや、コロナ禍で弁当配布という活動を実施したこと、会食型子ども食堂に来られる人々が結構限られていたこと、ボランティアの人数や参加方法の変化によるマニュアルの必要性など、以前は気づかなかったことに気づかせ、地域の問題をより包括的に考えさせるきっかけにもなった面もある。

このように、コロナ禍でも子ども食堂が注目され、増加し続けるのは、子ども食堂に、多様な役割があり、子ども食堂によって多様な活動があるからである。しかし、コロナ禍により、会食型子ども食堂を開催していたころのような居場所や食育などの役割はできてなく、多くの子ども食堂は昔のような交流する時間が多い子ども食堂を開くために工夫している。新型コロナウイルスの終息は未だに見えてないことから、コロナ禍前子ども食堂の活動に戻るにはまだまだ課題が多く、しばらくの間は、フードパントリーや弁当配布、少人数の子ども食堂の活動が継続されると予想されるが、コロナ禍による社会の情勢の変化によって継続的に変化していくと思われる。そのため、今後も、継続的に子ども食堂に関わり、コロナ禍により子ども食堂がどう変わっていき、居場所としての子ども食堂をどう取り戻していくかを見守っていききたい。

【参考資料】

むすびえ・こども食堂について <https://musubie.org/kodomosyokudo/>
中藤信哉, 2018『心理臨床と「居場所」』創元社、pp.24～25、pp.51